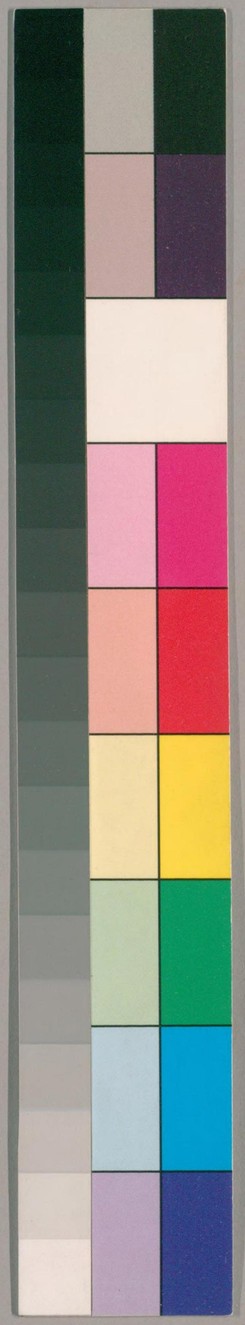
三世の光

七

182.85
Ko518m



国立国会図書館　タイトル『三世の光』 請求記号 182.85-Ko518m

ガラス使用

国立国会図書館蔵書

三世若はりの光れ七

長阿含経に説ゆふ世尊毗耶離城に夏安居しおはしますおわしも
阿難尊者はとめみうしろに侍らひのふに世尊れたまふならゆゑ
四神足を修し多く修しなるはけれど常に念じて忘れざる者は生て
ならんと思へは心れまくにて一劫をるても死なざることを得佛八つ
に四神足に住しのへば今一劫れ後まで世にとどまりへ天れるために
災をれでき安なことを得せし死んとかう告させの御阿難尊者魔
に却れられ御心懞々としてそれ御云堪ふを覚悟めなハはこれによわ
ていのにともこゝへ集らせなれば二度三度まへれごと告させのへど
もなれ答まゐらせなれば次に阿難与ゐらく時を志ばべし也

国立国会図書館蔵書

国立国会
25.3.31
図書館

112259

国立国会図書館　タイトル『三世の光』　請求記号 182.85-Ko518m　ガラス使用

告はをたまふとき始て御前に云はふをうきをなめ志事なるひて御足
を礼して去なふそれより秋ふれ冬に成り御なひに魔波旬来ゆ
て世尊今ハ御言はまくに何おとも成じをもつまなふおぼすことれ
もしまさじもやう般涅槃志なふべしと請じ奉流此時世尊暫やこ
祢家今涅槃をとらぬ自ら時を知と答はをなふ波旬又白し
なるむりし世尊始て道を成じなれし時家涅槃したまふ事しと
すめなめぬればいまぐ七尻ならぬ度しなふ事を度しを
もめなもずされば其時ハ涅槃しなるぬと此なるし今ハ其こと皆成
就しなふ涅槃にも入なふべき時なめいりなまば滅度しなるぞやと
うらこがれて白しなる世尊やこなく波旬佛みがりら時を志ふ久

巻七之一

しく世にハ住をぬこれより三月ハ後本生処拘尸那城娑羅雙樹の間
にて滅度をとるべし此告させなふ魔王ちらこひておもふ佛也虚
云しなるぬかうれなへ必ぬ涅槃に入をなふことをうらぬと歡喜踊
躍し身をかろしてきえ去ぬ世尊はそれより遮波羅塔に入りしま
し定意三昧に入御命を捨し御壽をとゞめなふ世尊大光明をも
明ち弱へ此黒暗ハ処もこれに照さまて御ひかんふことを見此時大地
ことハ分震動人みなおとろな身の毛たちふるひわなくきて何ごと
なんと思ひおそふ阿難尊者此相をみんおどろき恐れなひいそぎ世尊
ハ御もとにまうで御足を礼してやなふなやしう地ハふるひうごき侍ふ
何の因縁あるてかくほうご起侍るやと世尊告なふ世ハ中地の動に八あり地ハ

水の上にあり名は風にとてまり風ハ空にとゞまゝ空中大ひに風あゝ時
あゝてみづから起れは大水いやまし地あまゝ久みな動く是を第一とす
第二に得道の比丘比丘尼あり又大神号天ありて見げから力をたゝる
見ん空おもひ水性を観ずること多く地性を観ずること寸々なけ
まば地あまゝ久動く第三にて菩薩あつまて神を母胎に下しさ
まゝ時地大いにうごく第四には菩薩右脇より生ゝ時第五にはが
さい始て正覚を成ず給とき第六にて始て法輪を轉ずゝとき
第七にて佛教をたゝんとして性命を捨せんと欲すゝ時こゝ地
あまねく動く第八には如来無餘涅槃界にいつて般涅槃せんと欲
すゝ時地大いに震動すとかう空きをたゝせるひ阿難号者におか

せて現在の比丘尼を香塔にあつめたせるひあまゝ久勅しるゝ如来
今はへしく世ゝおりしまさゞこれなり三月の後般涅槃しるゝべしと
此みことをうきなり給ふ諸の比丘みなうへ此事とはさらにおぼされ
ゝ涅槃をこゝろなどもそのへと世尊にて何ごとも世に超させるへ
八世間にもなごうおもしまて人天を利益せさせるゝべしとこそこの
みなうせるゝらめ今二月三月のなどに滅度しるゝべしとはたゝまく
おぼしもよられぬを思ひ乃かなる佛勅にこれ此心之れまどひて何
ごとも御所元給ゝ地に身を形をあらを世号の滅度のいるな
まばたゞ事をやうおもしますやとてたゝ形きに泣のなしゝるゝ世号
これを御覧ゞてもらく此比丘尼に告させるゝみなたれこなうまへりな

しまって天地人物ことごとく生じた法を終(を)わらざる世間
有為(うゐ)転法(てんぽう)のさだめなることを悲(かな)しみ給ふときに
あらゆる仏(ほとけ)に天魔波旬(てんまはじゅん)告(つげ)まゐらせ来(きた)りて涅槃(ねはん)を請(こ)ひまゐらせよ
と今より三月(みつき)を後(のち)般涅槃(はつねはん)したまふべしと
への給(たま)ふを告(つげ)給ふ時(とき)に阿難(あなん)右(みぎ)の膝(ひざ)を地(つち)に着(つ)けて
合掌(がっしょう)して仏(ぶつ)に白(まう)さく唯(ゆゐ)願(ねがは)くは世尊(せそん)滅度(めつど)をとりたまへと
とぐまり住(とど)まりたまはんことを願(ねがひ)たてまつる
請(しょう)じ給ふに世尊(せそん)黙然(もくねん)として答(こた)へ給はず
三度(さんど)請(しょう)じまゐるに時(とき)に仏阿難(ぶつあなん)に告(つげ)給はく
神足(じんそく)すでに多(おほ)く修(おさ)めつ一劫(いちごふ)後(のち)までも
住(とど)まりたまふべしと阿難(あなん)三(み)たび告(つげ)給ふに仏(ぶつ)猶(なほ)
世(よ)に住(とど)まりたまはんとおぼせば心(こころ)おごりまくなり
しかさば汝(なんぢ)益多(やくおほ)く人天(にんてん)安楽(あんらく)を施(ほどこ)せ
ひし時黙(ときもだ)して勧請(くわんじょう)せざりつるそばつつ
ずや今此(いま)世尊(せそん)すでに性命(しょうみょう)を捨(しゃ)したまはんと
とき世(よ)ひとびとまうせのごとくおはしまさばと告(つげ)
はこれをうけ給(たまは)りつれば何(なに)ぞ魔(ま)のひあやまちせよと
免(ゆる)したまへとの給(たま)ふにはこころえ入(い)りて
記(あとさき)をもおぼえ給はざりかくて二月十五日(ふつかじふごにち)未明(みめい)の時(とき)に
世尊(せそん)面門(めんもん)より白毫(びゃくがう)を放(はな)ちたまひあまねく三千大千(さんぜんだいせん)
界(かい)の十方六趣(じっぽうろくしゅ)の衆生(しゅじょう)まで救済(くさい)したまふ此(これ)を造(つく)ちなせ

国立国会図書館　タイトル『三世の光』 請求記号 182.85-Ko518m
ガラス使用

し罷とゞめ煩悩もおれづゝ名に消れぬれば大殺涅槃種に佛拘尸那
城力士生地阿夷羅跋提河所に于とかなる法法羅雙樹の間におります
八十億百千人れ大比丘尼前後をうちこのこゑまゐらせるに二月十五日涅
槃の時に所ぶみ世にる神力をもて大音聲を出し上有頂までもそ
れ音をもいてあまけく尼生に告させるに一切尼生所帰依す法処とな
王が乃尼生我所それに殺ふことは子羅睺羅にことなしぞおぼしたぐ
えませるに如来應供正徧知大覚世尊々に涅槃に入るそんとおぼす一
切尼生もしうたがう処あらば今悉く問ふしとこれを最後のとひ出
すと所さまひ志させるにこれによりてみな佛乃涅槃しるにべきをしれ事
我所ぞてゝ所志みなるなり大地も山々も大海もこな悉くふるひうごく

所かとあ法人の乃涅槃をとゞめ事に勧請してなるべく世におりまさせ
事らんと拘尸那城にいふぎまうでぬる者摩訶迦栴延等れもろくの
大弟子それ佛光にあひるひ御身にるひ日所くかまゝをのげてなき
この所しみるに乃分数々ぎかなる比丘比丘尼所に皆大阿羅漢にて
威徳大施王れやうにおはしまにおなじう朝日れ出法ころに乃世にる若
光明にのひ身所毛らだちてともにうれへかなしみちれ所ぞをなぐ
しいふぎ世にる御事をとに詣しるに又位十地等の無量乃大菩薩ともに
まうで所へまゐるに此菩薩摩聞世にる御所しを祇し百千帀めぐ
王事にて座にはきるに又もろく所優婆塞優婆夷毗舎離城若
諸の離車等閻浮提れうちの所しゆふ諸王又それ夫人所王なくみえきせ

112259

国立国会図書館　タイトル『三世の光』　請求記号 182.85-Ko518m　ガラス使用

たまゆらぐ阿闍世王とそれ夫人とのこゝろをえんなれば阿りとあり法長
者居士ハ乃こゝろ阿ゆ王孫あるゝ者ようでざれ出て阿ゝば今をかぎり
心ゆ心どもをはしめしまひ志をつくす供養どもれ今までハまされる
事おもひや法べし又諸れ天王諸天天女四天王等諸龍鬼神金翅鳥乾
圍婆緊那羅摩睺羅伽那どのそれ類々乃むらがりまうで阿つまり供
養し事法さ尚めもこゝ後も及ぶ留きことなしんや此時ハなりて
此羅刹もちらに人をえたゞ其形尤ハえきも世号れ神力をかうふ
事てみな悉く端正なり樹林神王持咒王貪色れ鬼魅天れもろくの
婦女も後ゝれ鬼王天地の中乃神々みな集ゆ事阿つまりて風神は樹上
れ此時善を吹て雙樹れ間にちらし雲雨の神ハ世号涅槃しなはゞ

巻七之五

れ雨をそゝひで法焚仏れ火を消し事ゆらんとおもひ香象王はぬ蓮
善をぬきとり来ゆて供養し事り獅子獸王又もろくれ孔鳥王鳧
鳳鴛鴦孔雀迦陵頻伽鳥耆婆鳥那どもみないろくの花れこを
えたへ持来り水牛牛王は来ゆて妙香乳をいぶし供養にそれ乳拘尸
那城ハながれこそて阿ゝ田舘みでたまりみまでもハれ香あぢハひ
を具足す四天下れ中の諸神仙人ハ世ハめづらしえかうだしき花阿まき
ちれみを供養し蜂れ王はいろくの花をとりてまうで供養す無量世界
れ中間れ神又阿ゝ田ゆ山くの神大海れ神もろくれ河乃神れまうえ法供
養世ハことゝ那り薝婆善をもて尼連河ハ散じ佛足を礼し一面に
住す所れ時ハ拘尸那城婆羅雙樹れ林名りそりて志ろう白鵠れやうに成

ぬれゝにて自然に七宝の堂閣なりて其ぬ流泉浴池を思ひきに
免れその中にぬ蓮華なりそれどこ後ありて好にめもおよだぬさ海
は切利天乃歡喜園のごとし一切人天阿修羅等おもどく如来涅槃
の相をみなかれしびこのなしふにこゝに此時になりて四天王および
三十三天より第六天までの天庭前にまさりて更に供養をまう
ものふ大梵天王に於余の梵庭も身乃光明をもなちのふ其光四
天下にはまさし欲界人天の光明月日のひかりこそかゝ光明にさへられて
あらはれぬ後の宝の幢旛を供養しのふ其中にみどかしといふも上
は梵宮にかけられたほのすそ其中安羅雙樹乃間に敷かへるほそ
おはしまして佛足を礼したゞ祢のもとは如来なりまんでわれらが最後

の供養をうきものと称がる世のふ世等時を志ほとそうをはせのみ
ぬ毗摩質多羅阿修羅王無量の眷屬と共に詣すこちらく乃
宝幢をもてまそ乃蓋ちいさなもの千世界を覆上好の甘饍を
もてほうでいる様欲界の魔王波旬そ乃をんぶ天の妹女阿僧祇庭
と共に地獄の門を起らき清浄なる名を施して告ていふ汝等いかに
おもふとも善根のすべきわざ如し今もそこ如来の功徳を念じまる
ぬしかならば長夜の安楽をなるへのもんと又地獄の中の刀劍をのぞき
苦の毒のほのんなほ火燄には雨をそゝぎてこれを滅せしむ又此佛の
神力にもりてかゝもろくのけんぞくもみな刀劍弓矛弩矟長鉤鬪
輪羂索などをすべきて波旬の設ふ様供養一切人天にすべきその

中蓋れちいさ紀も中子界を覆み各佛足を礼し所もまんて衆
等が最後れ供養をうきたせるへよと願ふから三度請ずれども世
尊うけさせなるぞ波旬わがねがひ越ちるたぐ心ふうれへてしかぞき
一面ふ如ち大自在天王も無量无邊れ眷屬又もろく乃天后とく
もにまうでなふ所れまうけなふ供具所ら男ふ人天八部れ供養れものを
覆梵天帝釈れまうをなふ供養もなほ珂貝れかるさもらに墨を
所りめおきこ法やうに供養しなふ室蓋の中にてことふちいさきも
三千大千世界をおほふのくて佛足を礼しめぞか生かなふ此
無數帀なかれ乃時ふ此土よりも東れ方無數阿僧祇恒河沙微塵
のあなるに佛世界所至意樂義音といふすしこに佛おりします虚

空等如来とかし奉法十号具足しなふこの乃世等第一れ大弟子れ
無邊身菩薩ふ告たせなふ今西方娑婆世界れ釈迦牟尼如来
れ御もとにけ居しか乃佛ちうきなどに般涅槃しなさん此世界の
香飯をもて御うでか此世等に奉就すべしそれを合しをもち
般涅槃にいかなさんと勅しなふ无邊身菩薩佛れ御をしへをう
をかれ佛足を礼しそ乃御國を出て此娑婆世界におはしは寸か
しこちか此土までの間れ三千大千世界大地六種ふ所るはうごえ出
まにより至て梵釈四王も魔王波旬も摩醯首羅なとも つきなら
ぬ此地れ動す法ふおどろき身ふるひわなくかるに又身乃光明も
それぞかをうしなひ何ごとれいでくなるんとおもひ恐れていつくにて

げんとおぼすこの時文殊師利菩薩座ゟ起大衆に告ゆふ衆みな
おの御しこゝに於て是これより東れりこ無量阿僧祇恒河沙微塵等
の世界の所なるに佛おりしまの虚空等如来とか奉法十号具
足したまふかしこに菩薩所在无辺身といふかの菩薩数のぎり形
きぼさの衆と共に如来を供養せんとてこゝにきたりまうで座
ゆこの乃菩薩の威徳力にとりて此諸天などの光明乃所ゝ其
ざ法なりとかう告ゆるに時大衆ともに法のなれ東の浄土にお
ります佛をみ其家にあきらこの形る鏡にむかひておのがすがたを
見るやうにぞをりまれるにけふ又无辺身ぼさりをみ奉るに一こ
の毛孔より和のくつ乃大蓮華を出生しまふ其蓮華の上におのく

七宝八子の城邑所のみな七宝の雜厠國ともなり其中乃衆生毛もち
無上大乗の教をきくて余乃こゝをきりの大乗の經典を書
持し讀誦すかくて無辺身菩薩ゆうでおはしまの志ぼさり
の御身のおほいさは無辺身なれバまことの姿も虚空に都し
うしてたゞ諸佛のみんのふかの菩薩羅漢なども知せのなれと
この佛足を稽首し合掌して白しまふたゞ祢のたゝはあはれ
て家等が食をうけさせの人と世尊時をしるとてうをはせたまへば
南北西方の諸佛世界にも又无量乃無辺身菩薩あり皆来
まうでのふなどおなじさゆなり十方の微塵世界のもろくの大なさう
悉集會し給ふ此時娑羅双樹吉祥福地從廣三十二由旬の間大

空にも地上にも大宮こちくて微塵だけのすきまもなしその時
に世尊神力によりて此三千大千世界の地みな柔軟にて宮室莊
厳し西方无量壽佛のおはします極楽世界のごとし又此時大宮
乃明鏡にむかひておのが姿をみ清がことくに十方微塵等乃
諸佛世界をみ事なれて世尊御面より五色の光明をいだしまふ
此光明のみてりかやきて諸乃大會の光明にてらしにそりかなしは
光明なまひ十方をてらしをもりて御口に入なふ而る人
天の修羅なと光明の御口に入なふをみ事なり皆忘れ怖ていふ如
来さきにもなちなりし光明今御口にり事なりまこは必ず
十方にわいて所作すでに辨じをもりなひ御最後涅槃の相なり

らんいのにもして世にとどめ事なわざなりやといふみなしこな
ぎき奉りて共に歌こぶ此會の中に純陀といふ優
婆塞あり拘尸那城の中の工巧の子なりそ乃同類十五人と共に
座らかたちかなしみなこぶをふれて佛足を礼し白しまろたど
歌くは世尊なれんで比丘僧尼ともに家等が最後の供養を
うをはせなへわ礼等今より依処なしたまふ事れいを救護し
給らんや歌ぶくへ貧窮に苦しまんことはなぎり事仕れば今の事に
従ひて將来乃合を求めんとおもひ侍家なりたど歌ハわれ等が微
供をなされみうをなひて後殺涅槃しなふ為しとひとへにねごひ
其後世尊純陀に告なふとるにのなくまれ今無上の法夜を汝が身田に

成熟し法芽を生ぜしめて後の貧窮をわすれしめ給ひて檀波羅蜜を具
足せしむべしとかう告げたまひにき大衆随喜しこゑをあげてよ
ろこび希有なり純陀世尊最後の供養をうけさせたまふ純陀は実
の仏子なりとほめ世尊又純陀に告げたまふ仏および大衆に布施す
るは今此時なり如来今日般涅槃すべしとかう三度までのたまふ
純陀仏語をうけたまはりてなきかなしび大衆にむかひ我
れ世尊の般涅槃をとどめまゐらせんとおもふなり集まりし一切衆会
も共に五体を地に投げ同音に世尊般涅槃したまふべからずと
すすめまゐらすべしと告ぐ世尊これをきかせたまひ純陀いたく啼
きて心をみだすことなかれ我今般涅槃に入らんと

おもふなり何をゆゑにといはば法仏の法たるものは有為も又無為の
法をもてこの法やこの示したまふ文問答法をまうけたまひ
なかに来ませよかし文殊師利法王子などに問答しまうけせて如来
は常住乃法不変異の法無為の法にて越えましませば法界に生
死もなくましまさず涅槃も仏の深禅定なる涅槃ことをさとらせたまはんがため
かくのごとき身をおもはせたまひ又かなしきをやめまゐらせてたちまちに白し
まうす如来方便して涅槃を示現したまふことはうたがひなく知り侍る
どもいかで此涅槃をかなしまず侍らざらんこのうへに思惟し念じたまへ
実に有為の法にもかからせたまはぬことをよくしらしめておはしましぬる
なりにこそ世尊白したまへば世尊またいはく純陀よく如来の示同衆生

方便涅槃を志れり一切諸法はみなこれ如幻乃相なりの如来この中に
なりて方便力をもてし染着す法処なしいかにとなれば諸佛の法
志のなり純陀これ汝に生死れなかれを復らしめんとおもふがゆゑ
に今の供養をうくもし諸の人天最後にわまを供養す法もの
はみな悉く不動果報を得てほとに安果をうくべしそのゆゑ
いかにとなれば家は宿生乃良福田なほが由ゑに汝もし一切宿生の
為に良福田となるらんかおもはゞすゑやすに施す物を辨ぜよと
告げせるひ法面より青黄赤白紅紫などのいふくのをとな
ち純陀の身を照しまふ純陀これ光明にあひ事ゆてもろくの眷
屬とともに種々の鑄鐵をとりのへいそぎ法まへにまゐつて供養

しなかにのぼしひにこゝ又おもふに尼ゆゑから智恵なきことは蚊
竜のごとくにして如来の涅槃深奥の義をおもひたりはべきなり
祢ど今文殊師利法王子等のもろくの大勢象菩薩摩訶薩と
共にあり是をことにたとへざるとなきなき人乃始て出家しいまゞ
具戒をうけざまども僧の数に入ごことく家も佛菩薩の神通力
をかうふゆゑにこゝに大ぼきの数にあらはして如来を世に
ぬごくおはしまはせ生らんと云ふ事なしさたゞ祢のたゝ世如来哀
愍して今一劫乃間世に住せ法勢の人と白し生れ世号又純陀すみや
かに奉施して最後に檀波羅蜜を具足すべし少告のふにつまりく
たゞ一切の菩薩天人雜類この法云をうをのゆて異口同音にこゝ

国立国会図書館　タイトル『三世の光』　請求記号 182.85-Ko518m
ガラス使用

をあげていふ奇なほうな純陀大いに福徳なり世尊最後に供養を
うをしたまふかぞうに大庭みなくやうに成ほうけぬまどうけさせ
なさ稲ぞこ乃供具むなしき事ゆゑなりぬと純陀を讃じたづら
を賜げく此時に世尊庭に初生を満足せんとおぼして御身に毛孔より
無量に佛をあらはしまふけ御佛におはしく无量の比丘僧をしたがひおりしま
して此大會に數かぎりなき衆に供養をうをしたまふ本佛純陀に
まうをし抽をうをまふ法ふに純陀乃持まゐまは粳糧成熟の食ハ摩
伽陀國に八解ぢりなれども佛の神力に由ゑに一切の大會にこれ食をも
ひまゐ稱へひをり（此純陀のくやうをうけさせまふ事異説あれどそこに略す）純陀其眷属と共にいとれたう
かぬしみなさるなぐら如来をめぐり燒香散華し心を尽し敬奉して

去それ時大地六種にふるひうごくふぬ来に涅槃に入せまそん相
にぞおりまゐこれによりてもろくに天龍八部人も飛人も身の毛
たち又考をひをてなき偈をときたとへをはべて如来に世にながう
おりまゐやうにと勸請しまゐ世尊もちく乃比丘庭に告させた
まふ凡夫天人などゝ乃ごとくうまゐなきかなしふことなりれつとめしやう
ぶんし心をかけて正念にあるべし少ゝ示させ給ふ一切乃天人なども世
尊にかう説せまふをうをまりてこの如しひながらたゝ悪びて如かぞ
世尊大庭に為に古乃偈を説ひ給ふ

汝等當開意　不應大愁苦　諸佛法皆尒　是故當默然
樂不放逸行　守心正憶念　遠離諸非法　慰意受歡樂

長阿含經等にときなふ所乃時に世尊拘尸那城本生処娑羅雙
樹の間におはしまし御背痛せ法をなふとて阿難尊者をめしておま
しをしかさせなひ御座山をかゝにせ法をなふ世尊御みづから僧伽梨
を四にたゝみ御枕とし右の御ひきを申のに法を御面にしにむの
ひ獅子王のごとく御ひしをつきこめ法にぬ法せなふこの時雙樹の間
に神あり飛時の花を地にしき散じて供養寸迦葉菩薩御まへに
すゝみて白しなふ世尊やすでに一切の病をまぬかれなふ一切の衆生ハ
貪欲瞋恚愚癡憍慢あれども もろく の病阿羅世尊はふたゝびあれ
苦しみうれへおはしまほど何にもなふて文殊師利等に属して大衆の
為に御法をとけよと所なひ默然にしてふさせなふ如来実に病おハ

しなさゞいのなまは病阿羅と所をまひて甚深の大乗經典をと
のせなさゞ法如来何申志に無量の方便をもて大迦葉等の阿羅
漢にをしへて諸天衆も人衆も阿耨多羅三藐三菩提をしかぞ
かさ法やうに志なるほど又何の申志にもろくの悪比丘を治しなる
ざ法世尊実にやまひおはしまほぬをいのなれども默然としてふしれ
りします九十六種の外道に沙門瞿曇無常にうたさ法など軽
慢せし法べし如来世尊はうへなき仙人にておそれ給ふことおはしま
ほど今何の申志にこの右脇にふしおはしまして人天をうれへなしみに
志が免させなふなどこと塔を法そして御法をとかせなるこれを
すゝめなさせなふ世尊こ乃請をうきをはせなひ又えよりの大悲重心もろく

此宿生のおろく念ずる處を志るし知りしそれに隨順して利益せん
少しおぼしやすておきまひて結跏趺坐しまふ御りこゝろこゞ国の所のま
まほやうに見えたせ給ふ大光明をたなちまふにあらず光明いとうこう
さかんにして百子の日のひかりにも過さまぬ程くに見ゆ十方の諸佛の
世界を照しまひ色々の奇瑞をあらわしまふ迦葉菩薩文殊師
利大菩薩阿若橋陳如那どの大ださの大聲聞甚深微妙の法法
をとひまゆまへばにまにしたがひてあきらかに説しめさせまふ此會
にまうで集れる人此御法をうきまゆまゆ聖果に於ける阿耨多羅
三藐三菩提のこゝろをおこす今御ぞ佛法を慢じたる大外道も
非をしめて解脱を得なども數ぞおもひたりしわざなるべ

諸天世尊にとひまゆ給ふ今までは世尊をも宿侍をも守護し
まゆ御侍の世尊涅槃の後世家守いまゆ侍りんやと世尊のたまふ
今らの後毛比丘比丘尼をもじめ下三皈依をうゝ人間者みな佛の弟子
那れ八宗の世までも遺法の弟子を守護せらるべし少し告させまふ
此日の本の所まゆこかみ乃御すゑ長くたてまつらせまひ世尊の遺
法乃ここに世ぐまゆ御ゆくあふぎたふとむべきことにあん諸
佛神者今も世尊の遺勅をまもり給ふらん諸佛菩薩は
此護法の神乃御國を擁護せらるゝ御國に生れ
出る數人者難逢難値のおもひを明し解脱の孫をおもふべきなら
ばやそれ時に阿難尊者いづちへかおりしほけん見えまゆ世尊志る

しめし給ひ此とき此ゝに阿難はいづこにぬと阿若橋陳如にとはせ
ゐふ橋陳如答て魔王世尊に化して阿難をいざなひ十二由旬にあな
たふ侍りと白しゐふ世尊これをきりせのひかゝ魔を降しゐるん
とおぼし文殊師利菩薩に甚深の陀羅尼をたづけのひかしこに
おもしてこの呪を説のへよと勅し給ふ此時かしこにも六萬四千億
の魔阿のまゐて種々に法を説阿難をなやまし給ふ文殊菩
薩佛勅をうきこの乃魔底の中におはしまして告のふ諸魔あきら
かにきけ家世尊ちゐうけ給ふ神呪を説降しとて乃陀羅尼
を説のへ諸魔これをきくて皆菩提心をおこし魔業を捨て
阿難尊者をもなちまりぬ文殊師利魔を降伏しをもの阿難を

いざなひ世尊の御もとにかへつ至ゐうでのふけ時須跋陀羅といふ外
道あり此へすぎし世に阿難尊者とはらからなりまし孫阿まゐ
世尊阿難尊者に化益の孫あるこゝを志給しめし往て度し
のへよと勅しのふ阿難尊者佛勅をうきおりしまして求めのふに
須跋陀羅も世尊の世に出のひて如法をとりせのひ人天を利益
せ御身のふことを年久しう此法にあれど我慢にひかれ詣て拝
しまふことをなくざれ今後が涅槃遠からぬおりしますときてさすが
に御涙のゆりしう思ひるに阿難尊者のこいざなひの(ゐ)で志のひ阿
へぬまうでにて大般涅槃理をとりせのふみのかゝ乃むしろになる居
なるがかゝ如音をもて甚深微妙のこのかをとりせのふをうきのもの

ぬまばさだかりなかまし我見は山も一時にくづけて法眼淨を
得法を見法ことときとなれハすゑやりに邪見をすてゝ佛の正
法我愛護し深信堅固なり佛足を礼し出家し法才子なる
なるんことをもこひ奉法世尊ゆいの形く須跋陀羅善来比丘なく佛
道に入と告させるに此時須跋陀羅歡喜身にも心にも得まりて
ゆるこびかぎるまれしかみ衣をおはづかるに落袈裟身にはきゆ
いとなり法性は智水心は源にそゝぎ二度縛着れし煩悩つき心
とをて羅漢の果にはぼりるに聖果をはをたり尊敬を得ふぎ
んなり佛足を礼しひとへに右はりこをぬぎ右乃ひざを地につけ長
跪合掌し心にむりし此罪咎をくひ悦びのなしみおもぐにして

又白しるに世尊家眼得るは久遠劫れむりしより常に家とあれを得
ざむきはどもして無明邪見に志げみ三界分道法は中におぼ
まさむ害をなほことはれはぐし今如来は恩をかうふりて正
法に入悦び心にあまり得利世尊は智恵乃大海無量の庇生我
容てあはれひるにをみがりに我そりにおもふに累劫に身をくぐ
くとも些ぞらくの恩を報じ奉法にたらぬといひつゞけ法なる
だまえまし又白しなれる家事老鉢命いえだまえを得ぐるにぬ
がはえハ世尊今志ぢしはうち涅槃しるはぬ世におはしましてあれ
まみ教誡しなれよとなくく請じ奉らは世尊ゆるさせなれ
ぬ須跋陀羅はこ乃ねがひりなるはいとぐうまへりはしひ苦なる

かな苦れ流れ底生れ福はきて正恵眼滅せんといひ夢を行
げなきのへぞ身ちるは血乃安せぞ所がれを流かくなぎきて
世尊れ流まへ身をうちなぎたふれ悶弛しなひしが出ざし
なりて心はき所みざをおさえて白し殆ふ家今世にあるまて
世尊れ涅槃をえ事流かなしされ悪びがこうおぼえ侍まはまが
け坏器れ毒身を捨侍ふえ唯種がさえは世尊後り涅槃しみ
ふべし此いひをさかやがて涅槃に入なひぬけ時不可説无数億恒
河沙れ大菩薩も比丘比丘尼も一切世間乃天人阿須羅れども大慈
熱の父也たれみ事流佛世尊れ今ふ涅槃しけらせなさで皆世にすて
殆されなりて依処なくなりらきやうぢにまどさんことをおもへぞ

流れられを抱しみかりて慈志ことは事れのなしさに心これまどひ
を抱擁申ふ者所し其にもねをうち悶弛し三千大子世界なる
しひ惱ぼ世尊此時に八種れ流夢を出し大底に流ぎ侍をなふ
なきまへなき児れやうに所へことなられお乃くこころ我をさめけ
行苦生死れ大海の中にてつとめて浄心を修し念慧をしなふ
ことなられ三界に身をうくる苦しみ出車れ輪のめぐりくてうぎり
な紀がぎとしつねに無明れ郭至恩愛乃魔王此身をも心をそ
はこうは毛れ所して僮僕となしてまを流し却うこれにもけまはまを
て境界を孫じ貪瞋癡れ念てなまり久生死れ業を修生無量
劫ちりこのうへ常に苦悩をうくる者なりてこれをしらば所んぞ源

にりへらさらん衆曠劫よりこれ方すでに諸有を断じ金剛れ宝
藏常栄家淨なり今雖思議をあらはして方便力を現じ
大涅槃に入世法に同じ尻生に此身はいなひられごとくた
り如きことを我しらしめ佛をのぶぎこひしたるに心を起しむ生死
れなげれすみやりなり諸切輪轉れ法もかえれごとし汝等法と見
精進し正智をもとめてすみやりに諸有を出よとをしへ告させ
ゆれ又れさまに此須跋陀羅を過去れむりしより恒河沙れ佛を供
養しにあく善根をうへ大乳力にて常に尼乾外道の中にあり
て出家し方便慧をもて邪見の尻生をいざなひすゝめて正智
にいましむ今須跋陀羅本乳力に乗じて家最後の涅槃にあひ

正法をきゝ阿羅漢果をうるをもりて又涅槃にいれ家成道し
て阿若橋陳如を度し最後れ説法に須跋陀羅を度次家
事究竟すもしわまむさしう世にのりとも今にしをならじ
とれたまひ如ぐう歎してれのふとりいりなく須跋陀羅佛れ恩を
報せ事大尻そ乃尻を供養し塔廟をたてよと勅しまふ大尻
これにとりてなるべきをおもひ世尊れをしへにとりて香木酥油
をもてにれ尻を荼毘次ニれ時火中より大光明をはなち諸の
阿羅漢れためし乃まくに十八変れ神変を現じ又火中にりつ
入なふ無量れ大尻これをみて菩提心をおこし外道邪見れと
もがらも正見にいまり此時大尻悲感し舎利ををさめとり後

塔をたてゝ供養せるに乃時に世尊阿難尊者それ余の大衆に
告げ給ひ給ふ家滅度れ後法とめて第大涅槃を護持次第しわ
き無量万憶阿僧祇劫にこれ得る此大涅槃の法を修してい
ますでに顕説す此大涅槃はこれ十方三世諸佛の金剛宝藏なり
常に家淨まるとかにしてこゝろにこと所し汝等決定をもてこゝろ
とに佛の恩を報じすみやかに菩提をもるんと欲次まゝ諸佛摩
頂しなふ世々に生涯処正念をうしなはずは十方の諸佛常にそ乃
前に現じ与ふ所有一切衆生を守護して出世の法をもせし
めなふさまばつとめて此涅槃のみのことを修習すべしとをしへ
させなひなる阿難尊者に於てまひ給ふさせなふことはいふこと

やかにもなくれ釈種にうつ所れとおぼは世尊涅槃の後は阿難尊
者よく教誡し妙法を授帯し邪法に入なふなどのたまたむ
衆生を憐愍次べし形どいと稱んごとに遺教をとりせなひ
て此生むなしくるは後へゆるともかひなりたん勤ておこゝ法まじ
きさ法我説せなひたゝ涅槃時にあふ示教のくれざかしと
告げ給ふ阿難尊者此事哀愍をうけなり孫ひて出らり
御身もふるひ且なゝき茫然としてそのおほえなれば世尊の
御前にたふれぬし死人のやうにおもしまは阿那律尊者こまをうん
なひいりなまばおほのにかう愁にのみ志げみなふ如来の涅槃時
にあなふ今のくておりませとも明日出におもしまはばかり我をさ

めて先四問を啓したまへらるといはゞおどろかしまふ阿難等者
此いさめにやうく次ろしもれ覺え殆ひて世尊に白しまふ佛涅
槃の後六群比丘他家を汙さんのいかにしてかこれを治せん佛涅槃の
後車匿比丘といふんぞ共に住して示教せん如来世におはしまを
ば世等を師とし等家を涅槃の後者何をか師とし侍らんや今酒
でハ世尊に依て住し侍る我涅槃乃後也何にとりて住し侍
らんや又如来滅後に法藏を結集し侍らんに一切強乃もじ先
には何等の語をおき侍らんやとなく問事ゆゑ世等これをきりせ
のひて又はらに教示せきせのひ家涅槃の後者汝まさにわが
教法にとりてたゞく観ゞ六群車匿比丘に教示ゆべし我さし

ゆゑ住して上果を說すべしといと尊やかに告ゆふ先明によりて生死
に輪轉し又無明滅すれば三界すべてをこゝ涅槃の周孫をとりせこまひ
此三界つきたる我出世の人と所はく世說せのふ又佛滅後には尸
羅の戒を師とせよ而乃依て住す法にあて四念処によりて住せよ一切強
の始には如是家聞等乃語を安すべしとをしへさせのふ阿難等
者もやうく御心我をさめて御後の事ども細やかに問事ゆたまふ
又涅槃の後御棺にをはしまし事ゆゑ茶毗し事ゆゑ法を問こて
まいつまのへ金輪聖王の法にとるべしとのこまはしてその作法舎利
我をさめ塔をたて供養し事ゆまで殆る処なくをしへはせこまふ
それ時に帝釈天王世尊涅槃せさせ事ゆゑ御事身の舎利を家

にかくさせまへと乞事に給ふ世尊これをゆるさせのまゝにそらく
此底生に平等に供養せさせん少おぼすゆゑに右辺乃上頷此舎
利を與へまえんまく天上にあゆて塔をたて供養せらるべしと告
ひせまふ人天大底此のまゝひにこへぬを御覧じて又志めさ勢のふ
佛涅槃すとこそ汝等天人いこう愁ふ給こと如かれ佛涅槃すれども
舎利所れ出て供養所なし又無上此三藏法宝あり此因孫により
て三宝つゐに世に住して世間乃為に帰依の処となり等と告させ
まひ又告まふ家今涅槃此時に此ぞめに若き戒者は皈もしハ常
無常等にうたがひ所らばすみやかに問ひ疑をいまいて後悔なし
こと如かまじかう三度告させまへど一切四底皆戒皈三宝四諦に

通達しうたがひなければかなしみにこへ祢ども佛此神力のゆゑにし
なるべきをおきへ寂然として問なきなくなく世尊四底みなうたがひな
きまとを志語しめしらいなく四底すでに三宝四諦に通達して
うたがひなし如ほ淨水をもて身此あるをあらふがことへ勒精を
してもやへ出離をうなし愁悩を生じて迷悶乱心すなことなれ
ぬ此にまひをしへさせまひ獅子乃おましにおもしまして真金此御
手をもて着ひせまふ僧伽梨衣を志めぞけまひ紫磨黄金の
御むすをあらはし出し給ひて一切天人大底深心に家紫磨黄
金此身をしるべしと告させまふこの時一切四底大覚世尊此紫金
乃御身をあふぎめもたゞ如たゞ尺なきに此心ちくこれしき

こと比丘は第三禅にいるは快楽にもまきれり世尊は身を見せ
をはらせなひそれより無量无辺大涅槃は起りかをはれ十方
世界を照しなふ月も日もこれにおされてひかりをうしなふこれ光を
はれちをはりなひ又大虎に告させ給ふ如来出世汝等が為に劫をこ
さね勤苦し難行苦行を修せし大悲本願をもて此五濁世に
あらて阿耨多羅三藐三菩提を成じこれ紫磨金身も給くのお好
を以无量乃光明を具足して阿ま称之一切をてゝ寸けうちを
見えりにあふも此解説せばなことなし佛乃出世のまれなれ
これは優曇華はごとし今大虎最後にはれにあふむなしくる
法こと如ゆまに家本抵云願力をもて此穢土に生法化孫あまはく

をはりて今涅槃せんとおもふ汝等至誠は心をもて家紫磨
黄金は身を見此清浄は業を修習して未来世に此果報を得
べしと世尊かう三度祐んぢらに告げせなひ御身を大虎に見せ
なひ七宝乃御内のよりの大雲に於ぼりなひ又ゆのにてゝまたまひて
はじめはごとく大虎に告給ひ又大ぶらに於ぼりなひて出御ゆうに
そゝり給ひてわが身を見よと告なふはがりてりせさ勢たまふ
こと二十四返々に最後にはれを見をはりぬまは又ぬくひ見れ
おゆ形しなりにぎゝ見てたゝしめよ後にくゆ法ことなりまし又家涅槃
は後汝等ぞろく修行してはやく三有を出べし懈怠して散
心放逸なる法こと如ゆまてと示せなるに一切世界天人四虎涅槃の

ひろめに何は世尊をアル事なり大衆悉く三塗八難人天あらゆ
る煩悩四重五逆極悪の罪とがもらくほろびてなまめれしみな
解脱の果を得世尊ゆゑ御身は大衆にアルせをたらせたまひ
僧伽梨は我常の御さゝ御につけたせなりけれ御身いとゆたらいらませ
なふ今時ゑまりとのたまひやうて初禅に入せなりひ涅槃のひかゆ
をもてあまきく世界は観じ寂滅定に入せなふ初禅より出
て第二禅に入二禅より出て第三禅に入三禅より出て第四禅に
入四禅より出て虚空処に入虚空処より出て无辺識処に入无辺
識処より出いでゝ不用処に入不用処より出いでゝ非相非々相処に
入非々相より出て滅尽定に入滅尽定より出てかへりて非々

相に入なふこれより御きのごとく次第に禅定にかへりいらせたまふ
かくて初禅に入をもり又大衆に告げたせなふ我甚深殺若をも
てなまきく三界一切六道の諸山大海含生を観ずるに根本の
性離し必竟寂滅にして虚空の相におなじ名なく識那々
那がく諸有を断じ本来平等にして言下の相なし見聞
覚智なし繋縛すべからず解脱すべからず衆生なく寿命
なく不生不起不尽不滅世間にもあらず非世間にもあらず次
涅槃生死みな不可得なり二際平等にして諸法にひとしき
がゆゑに閑居静住にして施す処なきを究竟安置と可必ず
不可得那を无住の法より法性施為す一切の相を断じあらゆ御法

法相なし是を志れば出世の人となりがを所ことをしらざ法を
生死の始と形だ久汝等大底すゑやかに死所を断じ生死所は
じ先を滅すべし当かう告させなひ又禅に入超せさせたまふ
初禅より至次第にすゑみて滅尽定に入滅尽定ゟ出飛想
飛々想等の諸禅にかへり入をなふかう順逆に三度禅に入超し
なひもろくの禅定に入をなふこと二十七反なりけり順逆一反をもち
弱ふごとに甚深の法を説とりせなふさまでど阿難等者も悲
哀憂愁にしげみなひ御ことは語ほまぐとしてもあらおぼえさせ
なれはいとうう酒に忘て法人乃やうにて四底なみおはすといふて
ふこもせ等まぐ世に捨しますやすや涅槃に入なふやといふおとも

さぐりに知なれば是もろくの禅定に入をなひ三度みれりを説せなふこと
をも覚えなれば一切乃大底も大かたはさぐりにものおぼゆる人な
し阿難等者阿那律尊者に問なふ阿那律等者こはやりにさき
ゟなり此御あり至さは我らなりなひ世等はまぐ世に捨ましますと告
けせなふ世尊もろくの禅定に入をなひ三度御法を説たまひ
示誨をもてせなへ八七室乃御申のに右の御脇をはをてふさせ
なふこそしは此方を御枕と勢させなひ御面西にむりたせなふ
此御申のにかゝまた御瑞路どもいとたへ形の娑羅雙樹の林は
四雙八雙なり御申のそれ中にあり申来になりぬまは第四禅に入せ
なふ此時般涅槃をけせなふなり大覚世等涅槃に入をもて勢

なんばの乃娑羅樹林西東北二雙たれなひて花と木となりて
南北二雙も相なぐう清由の北上にたまあひてひと木空相望と
もに如来をおほひまるその娑羅樹いとようしぐれて花もこのゑ
もなくびなくさりやまなりしもんぶうちに色りもの白き霧
北やうにんゆ雨がやがて枝も花も悉く落やうくにりれんぶけ
散て名称なくなりぬ乃ときに十方無量北普佛世界一切
大地山も川も大海もいとのうこうふぶはうごきいろく北音をいぐ
し苦なる流れいのにせん翌日大涅槃の山にかくれさせるひ生と
しいきれも北みな真乃慈父を失ひたるし子となる流今より
たまりたれをすくれん正覺すでにかくれさせるふ底生の罪苦も

夜になぐれ生死北大海正路を失ふべし何にちかりてうこれをまぬか
れん又底生敬処の天をうしなうたうとみあふぎて福を頂ぎ
よしなどいひたぐきてなぐきかれしふ夢さ満ぐなりけ時も月日
北をかりもかくれたるやうにていとえ落う大ぶうも物さびしうて
なめたちともにこの形しひ北色にぞ安里々和忉利天底大宮に
あつまて曼陀羅義等北天義天乃末栴檀をなめふうし世界
の御々人に散し大底乃うへの色散し供養し等ら流梵天王
帝釈天王金毘羅神密迹力士佛母摩耶雙樹北神娑羅園林
乃神四天王忉利天王鯰摩天王兜率陀天王化自在天王他化自在
天王おれく偈頌をたらはてかなりひをはべ微妙の天義天香を

散じ供養しまゐ給ふ十方世界の諸天も大衆にうちくてみなと
もに供養しまゐらせ乃比丘尼世尊のいまとらう示し寄せたまふ
こと形がらいまでかかなしひにたへ給ふん皆身を去にまをうちて
いまな社ぞ世尊のかうは座う世我ちらをまひけむとかなしひな
ぐきまふことかぎりなし阿那律尊者比丘尼をいさめまふ諸天
ならにあり凡人我やうにかれしひに志ゐまばなやしみとゞめらるく
おゆきもやならん大尼共に心我をさめて一心に世尊の遺勅を
念じまゐまへよりいさめ給ふ是とりもちくの比丘尼よりもすがらに
ともに法語を講じ夜もなかりきにならぬまでで阿那律尊
者阿難尊者をとりびまゐ尊者城に入りたまふ城中の人に佛

の涅槃なりたせまふことを告もし又供養せんとおもふ者は心の
内に供養をなすべしと告まへとまふ阿難是によりて佛
足を礼しひとりの比丘我と申なひ那みぐれがら城に入まふ其時
五百の末座一処に集り居て阿難尊者をもんむらへ集めて礼拝し
尊者いまなれぞ業ならばさやうおもしほしく心間を深阿難の
まふ世尊の夜涅槃に入せまふ是を告んとて来りしなりもし供
養せんとおもはゞ供養すべしと告給ふ末座尼これをきくお
と語きかれしびいまなれハ世尊りうはやう涅槃に入せまふらん
世間眼を失なつりとて悲慟し那えぐ我おきへなどがら皆間なる
荼毗乃法いまじ生存ぞきやと而れ時に帝釈天王おはしまして先

此佛勅乃まゝに告げ出せるゆゑ是なくの末羅城にあまりの人民に告
共に金棺を造る七宝の荘厳所の王御茶毗の料微妙無價
の白氎千張无數細軟の妙兜羅綿を出し此人栴檀沉水などなら
ゆれ供養の我もの我所のめ法みかさまた御さま須弥山乃やう
に見る是を辨じをもの諸人のなしひかれしひなごのゝ世尊の
所にまうで見なめて出げたるに所もれさもかなしさもいや増の王
にまきめ法く皆もれもおがえぬたゞ形きにあるべし所にて
至れば屋きならばは先御うへて御香華幡蓋などと雲のやう
に供養し奉りと以てう敬ひなめて御棺にをさめ奉れ御身
にきをかれならん事をおかれ細妙の白氎を御身にそへてぞをき

めなめ今御所て御棺の中に香油をかゝぎ立て閉奉御この扨戸
城の人々の力をかゝぎ金棺をさゝけ奉め城内に入て供養し奉ら
んとおもひ世になるべきなきカ士よりもをえらびて所をなすべ
ごりせるなれば御まとめ又きもめて世に喜ぶれた御力士十六人をえ
らびぬしてあげ奉御になほうごかせるなれば阿那律尊者これを
見給ひたとえ城中の人殊里家人集めて御ともなる
力にはなだし阿のまま家大后と諸天の力を請じて共に御棺を
城に入なるべし此告なる此云繁をもてこれなうちに帝釈天王微
妙廣大のきぬがさ天の香花幡蓋などと数のぎのなれ之やうの相
天乃音楽を御うけ諸の大后と共にみな形ぎをながし大弟に相

さし上て聖棺を供養し奉りけるに第六天色界天なども是れ
なし空に於て聖棺を供養しまゐらせけるに阿那律尊
者は如来を棺殯し奉葬ていそぎ忉利天に登り摩耶
夫人に御別をつげ法を告まゐらせければ摩耶驚なげき給ひ悲がるな
かなしませ給ふぞ仏ことをなほも始め天地ふるひうごきて他方より
菩薩諸天までも残らで集り給ふ涅槃の桐を此摩耶夫人
大迦葉尊者なども乃ち給はぬことよ凡夫その他おびたゞしき
ことに給ひ悲しみ出すどもは恋しおもひ給ひければ断腸した法
きて世間眼をうしなひ悲しみ事ちりと此く悲しく然れども世の常は悲しみも
是く荼毘し奉らんといそぎ雙樹の下にて荼毘まゐらせ

金棺を見まゐらせ給ひて更に又御心ぼそくしなされせ給ふ御前なる
人々みな御面にて悲泣にくれたり見給ひし人も只御棺の
御前にすゝみ給ひて頂礼しまゐらせて過去無量劫よりつきせぬ母子と
なりてもわかれまゐらせしが今度生れ福尽て涅槃まゐらするを
なふいたの時をまちて此又見まゐらせんともおもひ給はず世にたぐひなき
世の中にかゝる悲しき給ふ御衣鉢錫杖を御覧じても如来世に
おはしまさぬ是故まで人天の福を得たまひし生死の海を渡し
すらふ今は更おはしまさねば其徳もむなしく給ふぬと仰せたまひ
ゆたかに御なみだ流させ給ふ四衆これを見まゐらせつゝ涙にむせぶ
に又の給ひしさふにたへず悲しみ給ふとぞいふに此帝

釈天の神力によりて河となりて流れけるを此時に世尊
御神力をもて金棺を見らしのせのひ獅子に乳をじめて窟を出る
奮迅のいきおひのやうに御棺乃中ゟ合掌し立せのひ御身
の毛孔より千の光明をもて那ちのふ光となりくの光明乃中に子孔化
佛おはし御次ぬな合掌して摩耶にむかひ母我問訊しのふ遠く
此間浮提に下らせのふ此涅槃は諸行法尓なり穢がもえ来てな
ぎりせのふ古と那ぬれ也告まゐらせのふ阿難等者此御所にさ御
をんなり那みぐなぐう世尊にむかひ宮なりのふこそひ摩耶夫
人乃下らせのひしさ御を後世の衆生必ず家にとひ侍るべしいの
に答侍らんやとゆのふ世尊後世の不孝の衆生に孝養我をしへき

せのまんとおぼして金棺ゟ出させのひ合掌問訊して諸偈を
説せのふ（諸偈をとゝをのふとありて偈文なし）是を佛臨涅槃母子相見強といふ所雅
かえのごとくえ持せられよとのまひ御棺をとぢてもとのごと
くいしせのふ摩耶夫人世尊涅槃の御所にさ御又説をのふ送強を
はじめすべて御きよりの御ことを阿難等者にとひまゐらせのひ
何ごとも何れにか那しうのみおぼさまいくゆのふ如来遺勅し正
法を君と大迦葉とに付属を御せのふ与へく勤精進して御を
しへの御護持し人天を利益せさ勢の人荼毘をんなるに堪ぜ
とのまひやがて天宮にかへつまれがらせのふかえて世尊乃聖棺は諸
天と大衆也の供養しのふうちに人の所ぎをならぬにおれがらの此要

羅林より虚空に覚らせるゝ事は一多羅樹だりゆにぞおはし
ます須此時帝釈天七宝は大きぬぐは四柱乃宝臺四面に微妙の
荘厳なり七宝の瑠珞をたれたるをもて佛は聖棺をおほ
ひなり又まへ乃ごと香花旛蓋などを供養しまゝ微妙は音楽
ならに起ぐきて起こゆ第六天色界天などもおれじやうに供養
しまゝ拘尸城は人を聖棺のならに引ぼらせ給ふを見なりても
又なきかなしひ御前にすゝみて供養は七宝真珠香花瑠珞
を散じ妙なる雑孫雲はやうに打なびきゆ大宝にも大地に
もなえてをなづしうちおきゆ聖棺を供養しまゝ金棺はそれよ
王は女羅林を出させまひ宝に乗じて徐々として拘尸城は西門より

巻七之三十

入せるゝ其時拘尸城なる由は士女死数は菩薩摩聞天人大宝
虚空にも地上にもみちくて如来大聖の灵棺にしたがひめぐりゆえ
まぐうちなぐき心もならにあふ事をがみなりゆくたゞなきに
おきかなしひて供養しまゝよりほかはこ空なるゝ事は拘尸
城は一面縦廣四十八旬だりゆなる事をもとぞかくて左右に拘尸城を
七帀めぐり給ひ居りて聖棺又城は西門ともに入せるゝ其時一切乃
大宝微妙は香木梅檀沉水なる由は宝香宝幢旛蓋等を茶
毘は処に供養しまゝ四天王などはもろくの大宝天上上妙芸梅
檀五百根出乃世界の番どもに似ぬ事なるゝもなるゝを茶毗は処
に供養しまゝ第二の天王一千根第三の天王二千根第四は天八各

三千根牙五れ天を各四千根牙六の天はおろく五子なり色無
色界れ諸天をたゞ香花をもりて茶毘れ処りおりまし供養
しまふ阿那律尊者は天と人とに妙香木六子根をこひ茶毘乃
処に供養しまふむまし世尊成道の時恒河れ小岸に栴檀一も出
生出けるがかげ寄うたちれぼりふときことを車輪のごとくなる
七多羅樹だりにぞなる今は匂ひ世界を薫じ如来を供養
しなれこれ樹の神木と共に生し常に此香をとりて世尊に供
養し奉ちが世尊涅槃にいらせ給へば此檀樹もかれ枝葉みな
落樹神も神去ぬ餘れ神この香樹をとりて茶毘れ処におろり
供養しなれば茶毘処は過去乃諸佛御茶毘れところにて往

古れ諸佛乃宝塔ともなり金剛不壊堅固れところなれば今の世尊
も御本願力にちなりまゝにて茶毘しなれば事に称んなりまゝ如
来大聖の宝棺ちざいに空切せたせまひ茶毘の処におはしまし
七宝れ床乃上に下りまふに御床庇妙れ瑠璃无價れ雜綵を
もて荘厳せり涅槃より今までもや七日を経に今れどけ城中
れ菩薩夢聞なし由ふ天庇諸人世尊れ御神力にてひとりも
飢渇の志れ人食をおもふ心れし皆宝幢香花などをもて
佛棺に志ることはめぐりたゞなきまゝしひて如来を見なきさて
下らせまへぞ又大庇微妙れ香花幢旛天果を佛棺に供養し
まつりて細微乃白氎にておもしく手を洗ふみ謹み敬ひて宝棺

とりめ来をたすけ出し事の御床におきまゐ是をおがみ事の
ては又なきこの形しは供養し奉り微妙の香水香泥をもて御
えしよりの御足まで孫の処なくあらぎなくひ事の又宝棺をも灌
洗すきとりなきなきとたとふ事へ也れし宝香を焼し七宝の花
を散し無数の宝の幢旛きぬが法大地にたみあらにもこちくて
供養し事御是とりの無数乃妙兜羅綿をもて御えしよりも
御足までまとひ法くみ事の所の上を上妙无價の白氎子張にて
次第にかさみ御事の又皆白氎にて手をたくみたすをさらげ
まゐらせ川宝棺にをさめ事の法紀のごと香油をそゝぎこそて
棺門越とび姑をさめ事にしだにかなしさたゝぬ事へもなくさるし

をこゝびまでゞに二度をつみ事にしとおもふり形しされ人にこちく
ぬきはうつて心の人ひとりもなく天地こゞかなしひの夢のみぞふるひ
わこれ分にせんすべなくれぞとにもかへり毛たゞ形へく青蓮旛
蓋妓樂などを供養し事御ことぞ心事のなかさ紀に大乾
集められたる香木どもたきみのだせた御の須弥山もかくやとお
もふだこの云ふ大香樓となり香氣世界にかたりみちぬ四面
に七宝の御の御事ちて絹ごき旛蓋瑞路雲のやうに雲に聞る
がつの人天乃音楽のあらなしひんく供養し事御人天大乾ともに
聖棺をたゞぎぬ香樓の上におきまゐ聖棺樓にのぼらせまへば大
乾七宝の香炬の車輪のやうなるをともしもて来りて茶毘し事る

諸天人庭は音楽をぞきゝ海さゝめいろ〳〵乃散華雲にちゝまぐふは
宝炬は火香樓にちこのぼきぬまばおもひ孔分にたちまちにきえぬ
又大庭宝炬は火もえはぼ海をおきぬまど皆おらぼき由海神こまを
をゝ年の海中は火にて茶毘し奉らんとて大宝炬をおまうで来
まど火又きえぬかゝ御茶毘は火のもえば海はいと不思儀ぬ就ぶ
大庭みな何は由急ともおもひ知ざ海うちに大迦葉いる者五百は御弟
子と共に海うでおりしまゝ次此尊者出て拘尸城ゟ五十由旬だりゝあ
ぬるなる海者闍崛山におりしまゝ身心寂然として三昧に入のひしが
たちまち御心にすぎ御身ふるひぬまゝバおど後き定を出て御覚
す海に山地震動次狐観じゝのゝバ如来すでに涅槃にいらせのふいと仰

たう如ぎこのせのひ御弟子に告のふ苦なるかな家佛大師般涅
槃にいらせ給ひもや棺乃うちに入せのふいそぎてかしこにまう
てなむもし茶毘し年程ぶて二度世尊は三十二相八十種好
は真淨の御身をゝ奉らざらんとていそぎのゝど佛を敬ひ
のふけよ至ゝを飛行しのそば御弟子と共にかちゝのまう
でのふいそがせのゝど七日を屋て漸拘尸城に御ひ来なる海路
にひとのは婆羅門の天花をもて海河の渡る者ゝのひて君何れよりおいし
々ゝや空とともせのゝで佛般涅槃しのふわまそは茶毘の処にま
うでこゝに来ぬといふ其もまはいのなる海花ぞと宿のゝだこれ茶
毘の処にて切侍ふ空答ふ乞のひ今れど家に持りつりて云親に志

めし供養せられをん此志なりまとてまゐらせ祝ばかりまなひて頂上
に法をいたゞきなひ志ざしは物もおぼえ此をのえざりましがこゝに
てかくなげきゐて時うつりまなばは茶毘しまらんと又おがしおこし
こくすゝませなひ城外小門より入なふ此物戸城は大迦葉尊者有
孫此地なまぞ城中にいゆ供養此ものを乞なふに妙なる法白氎子
張と死数の妙兜羅綿を以なひ又宝善香泥香水香油宝幢
旛蓋音楽弦歌瑞路など数ぎつまなふ以なふ是をうをなひて御
弟子と共に茶毘乃処に赴りひすゝみなふかしこに大庇如くく帝釈
天王に宮なふいゆ以ふ火を以侍めて如来を茶毘しまゆ侍らんやと
帝釈答なふ庇志ざらくまゐれよ大迦葉此まうでなふを待せなふなり

小さ此さまひもをたゝざ法に大迦葉なまるの御弟子と共にすゝませ
なふ大庇是をゐんまゐらせ路を起こきすゝ絶なれば大法に佛棺
をゐんなりなひみな共に一時に礼拝しなひしが度ごとて地にたふまゐ
臥してもれおほえなるぞやゝ起ちうして漸御心ちきてなみざ
那ごから大庇に宮なふいゆき法にして大聖此金棺を起らきまらんやと
大庇佛涅槃此後二七日をゐぬひらきまふことは恐まなんと答
ら法如来の御身は金剛堅固常楽家浄なり徳香芬馥なしく
栴檀の山此やうにおはしませはいゞてそんじ此せなんやと此さまひ
佛棺ちこのうまゐりなへば金棺おのづの言ひらけ千張の白氎妙兜羅
綿毛みなとを散て紫磨黄金此御身なりされさせなふもなれ

お好少もかたらせのふ処おたしまさはこれをおみなのひとゞけれさもかしこはも御心に何まの給ふらん又志ぐしはもれをもおほえのなさゞなしごのやうく御心我をきめて若に香樓に於ける香花旛蓋音楽などを供養し奉り香泥香水をもて佛身にそきたりひ奉り又香我燒薬を散じ御弟子と若に先に切のへふ如兜羅綿をもて佛身にまとひ次にそとの兜羅綿をもて形綿我上にまとひ又なるらしき手張れ白氎を次第にのきまして兜羅綿の上に両尖をふ両尖氎をそれ上に法を次第にまとひ奉りをもの棺門をとぢ七宝れ瑤路などを供養し莊厳し奉り御弟子と若に右繞七帀しなるれぐら長跪合掌して

苦哉苦哉大聖尊　我今茶毒苦切心

等れ偈を説をもの人ば世尊大悲金棺より両れ三何しを出し千輻輪相を現じ迦葉に回示しのひそれ千輻輪より千乃光明をもなちあまの之十方一切の世界を照しのふ大迦葉是を見奉り御弟子と若に千輻輪相を礼拝し更になきかれしひ〻若に又七帀見えのをもの佛足我礼しのきまして哀歎し奉り

如来究竟大悲身　平等慈光無二照

等れ偈我ときやく記さしうれるごに志のみのふ千輻輪相金剛乃雙足御棺に入勢のへば封閉をとれやうにおもしまれ何のまれる大庇大迦葉れなげせのふをしんなのあにはなきかれしふ勢天地もう

ごくぼうきこゆ一の法なとに拘尸妹れ力士四人身に瓔珞を法け
七宝れ大宝炬をともして御うで来つ王荼毘し申らんとは香
樹にちゆらんとすれぬでたちまちに火きえぬ大迦葉告ゆふ大聖乃
宝棺いので三界れ火をもて焼申らん力れ及ぼきにあらばとれ
まんど次に極大力士ゆすべて三十六人みな七宝れ大炬を出もし
持来つ王志ひて香樹になのぐされとこれ火ゆなくきえて香樹すこ
しも損ぜ法処なし迦葉りさまて制しまひ如来の宝棺は人
天ゆゑ申法炬火もやきまふ所きにあらばあづらもしく志ひて労
す法こと所せそ出告ゆふこれにゆゑて大庇又所えく一時に礼拝
し七帀右にめぐりをもれぞ如来大熱れ力心胸れうちよりも火を出し

ゆふに乃火棺分にもまた出漸に荼毗して七日を経ぬ香樹ゆなく
焼法えしゆふ大庇此七日れうちもかなしびの歩殆ばこゝろれうぎゆ
供養を法えし申法その時四天王れ大瓶に番水をもつ王こゝて
来り又須弥れ四垂に四大香潔にして甘乳を出ぬ樹あゆめぐりゆ
圍ゆき百由旬これ樹を知きゆ下に王荼毘れ処にまうでおれく香
瓶をうけし樹のゆゑ甘乳をかくぎ火をけして舎利をうさめとゆ
天宮に入つ王供養せんとしゆふされどに乃火いとゝもえ増めてき
由ぼくもれしこまをうて大海の神河れ神宝瓶に香水をもつ王
きたゆ香樹にかくぎ舎利を求めとゆて住処にて供養し申
らんと次此時も火うくくたゆんなあ阿那律等者此さ法をうんゆひ

ておれく舎利をとり望り為めて供養せんとにはらぶや是れこれ
貪心なりあし舎利天上におそしまし海中におそしまさは地居
れ人をいまでか行て拝み供養しまらんやと告るに四天王これをきく
たまひ懺悔して天宮にかゝるれがりるに海の神河の神もみな懺悔
しておれが住処にぞこの為望々海其時帝釈天王七宝れ瓶い珍く乃
供養れ具をまうけ茶毘の処に下望満うで殆ふけ時に火おれづす
らみなきえぬ帝釈すみ宝棺にちかづかんとしるに阿那律等者
何ごとをなしるにやと宮をるへぞ世尊ゆきに家に一牙れ舎利をは
たへおこのせるにはまぞこそ家まうでぬれば茶毘おれづすらきえぬ
牙舎利を請ゞ事の侍和なりとれてまひ佛棺を起らき上の頷れ

牙舎利を納めとり天上にり為の塔をたてて供養しるに其時二人
れ健疾羅刹阿望帝釈天の御うしろにかゝれ来望一雙れ佛牙の
舎利をぬすみとりぬされどこれを庭中に知人なし城内れ士女阿
由海大庭きそひ来り一時に舎利我とりまらんと阿那律等者
これを制しみな志ぞらくまちて世尊れ説のごとく安祥として
如法に其に分ちて供養すべし此告るに庭内れ制をまちひぞ弟
鞘弓箭などれ戦具をとりおろくわまさなるにとはらそひすみ
佛棺を起らきまた鬼羅綿白氎をとれまくにてやけぞ大庭是
を見まり又いと此さうなきこの形しひ深心に礼拝し長跪合掌し
如来以大自在力　於一切世得自在　大悲本願處此土　周旋苦海度衆生

等れ偈を説れんく讃じ事め哀をはこして供養し事はこれ
ゝめ阿那律等者一切人天の為に城内れ人と共に宝棺乃処ゝり
おはしはしはくしみうやまはれ白氎兜羅綿をなきのんば迦葉等
れ白氎ゝ子張ともに全し城内の人れ白氎は一雙を残して餘
は灰とぞなれる兜羅綿ゝ宛然としてもとれごとし阿那律
尊者白氎兜羅綿を細かにさ絶て大底になるん氎灰をとめ
底にはこのもち殆ふそ乃余の燼灰をも底なほをはめとめぬおのく
宝塔をたてく供養し事は城内の人先よめ近をなはれて八の
金壜八れ獅子座をはこめぬ皆七宝れかざめなる其壜おれく一
斛をうへ獅子れ座の上にれらめ座前にれのく三十二乃力士あり

おれく身に七宝の瑞珞雜綵れ厳をはけて獅子れ座をはらぎ
又座毎に身をぬにすぎれる三十二人の妹女なめ八人ゝ壜を
はらぎ持次乃八人は七宝をもてかざれる絹がさをとめ壜の上に
おなに次の八人ゝ宝劔をとる壜をまほる今八人ゝ雉毛のもち
をとめ壜れ四面にたゝ座ごとに无量れ人数あめ幢旛宝蓋等
香瑞珞をとめ妙音楽をなし圍繞次又無量れ人あめり箭
矛鞘罥索長鉤などのなるゆる我具をとめ前後を圍遶し
拘尸城ゝめ茶毘の処にむりに八乃獅子れ座なめ城を出てれち
城内れ人数八城ゝめ茶毘の処まで路をたゝげ香泥香水を地
にそゝぎぬる路れ毎邊には宝幢旛蓋等れ雜綵音楽弦歌莊

嚴を造えて大聖世尊の舎利をまちまゐらせ奉ひ力士は獅子の座
を荼毘の処に持いたり深心に礼拝し供養次世尊大悲力のゆゑ
に金剛乃体をえてきこゝろなる舎利と形しるひたゞ四牙を持み
もと乃ほくにさゞめけせるゆゑ大宮舎利をひんたてまつり又なきりなしひ
りく供養し奉ひ阿那律尊者城内の人と共になみだなかし舎利を
とり獅子の座の上なる壜中にをさめるゆゑ舎利の座なるをさめた
まへば八乃金壜にみちぬけ時又大宮なるべく供養し奉ひもちく
の力士をはじ免圍繞の宮獅子座の舎利をまもり城内の人と共に
香泥の路にしたがひ免ぶり拘尸城にむかふ人天大宮哀號し供養した
てまつり至て舎利に随従次舎利城内におはしましきぬまゝ四衢

巻七之三十九

道の中に安置し奉り四兵軍宮おごそかにしておれく鎧かぶとを着
戦具をとり城を免えりまもりかう儀式を形せども戦諍をおも
ふにならぬたゞ分人の事を抄掠せんをふせがんのとそほひのみなり
五百の大呪術の師あり難を遮せんなめに城の四門をまもる兄数
の宝幢形どの荘厳例にかたらぬ又城の四維に大いなる雉毛の鬼が
しらの旛なり標式の為にぞあるなり又五百の大呪術乃師あり共
に獅子の座をまもる天然夜叉神鬼などの来りてなぎむき奪え
んをたえきらん為なり此七日のうちにもちくの國王まうてるゆゑ劫
毘羅城の王もちくの釈種等は世尊の神力おもほ次ゆゑやおはしまし
をん入涅槃の後日数をふれとも震しせるゆゑ三七日乃後はし免てきく

おどろかせまひいりなれバかうもやう涅槃に入をまひきん世ぞ人乃
もやうちゆ志里を拝み奉めるゆ御を分ならぬ家りこぢまいので知せ
ゆるさぎゆけ家ぞらんと共にあるひ所ぐりせ殆ひ愛とも現とも
おぼしまゝ礼ぬぞ御こゝまゝ里なる御何ことをもとゆ御ぐるゝな
いそぎ拘尸城に拝もむきまゝかしこにおもしましつきてアんまゝぞ城
外には無数ぞ兵庭おかこみ御ゆゆ城内には四維に雉毛の鬼が
しられ旛阿ゆそ所分宝幢旛蓋ぞどの荘厳云紫れ及ぶべくも
なし御門を守る事大呪術師に世尊涅槃しまゝゆやと宮のへば涅
槃ぞ後もや四七日荼毘すでにをもしせまひやがて舎利をわかち
奉らゆしなゆと答へ奉ふ王是をきゝまひ家等は世尊所生ぞ眷属

巻七之四十

なゆ佛ぞ神力にやゆらんりむかゆ御ことを今まで知まゐ程せざりし
せ免ては舎利を拝み奉らん路をひしきいれらるべしと所ゆふ呪師も兵
庭も御ことまゆ事ぞまばいそぎ起しきて入まゐらせぬ舎利ぞ
獅子座におちしますを拝みまゐらせまひ御ぞこゝ免ゆへ殆ぞ
ぞ久く礼拝し七帀免ぐゆをもつ里衆に告て家等如来ぞ舎利一分を
請じて供養し奉らんと所殆ふ大庭君などぞ皆まぎれなき釈種
乃御すぢとは志里奉れど世尊先にすでに所ゆまひおりせまひ
て舎利を分布しまふおもく請至あり釈種にはおもなぞれば
いのでゆゆまんとくり座ゆまゆべしと答ら御王をはじ免皆見を
守まひまことにの所しみまたへまゝぞ志ぞしはもれもおぼえ殆もぬ

さまにて地にたふれ毛のも其のなれば起ましませしが漸形えざなが
ら衆人にむかひ給ひ世尊汝等をかなしみて涅槃し
ぬふとも世尊は家釈種なり一分の舎利をわかるべき汝等は心
法よさいの形法ほどなるんと其のひいと以てうれみのひいと
もに舎利を礼し七帀右に免ぞりをなしたまひ是のごとくしめぞきさり
ぬふ形さけ所法人をやしまゐらせても其に深れも増るべきことぞか
し摩伽陀國の主阿闍世王は先に提婆達多の事のよりの父王を
害し位に光明のひしがみ所からふこのえそ乃悪業をえひ恨みのふ
まくに御身にあしき瘡生じぬこれ変えるしませのふちこのきたる
世尊月愛のひかりにふれ御身の瘡やうく愈ぬれハ与語こひのひ

て世尊の御もとにまうで哀を求め懺悔しのふこれ時世尊大悲甘露
微妙乃法菓をほどこしのへばこれをもて身の瘡をあらひそく
ぎのひ極重の罪毛すゑやこの小なるをもてとも語こひいくりへのひ
此語は本國に於はしまし涅槃乃ことを露志しせのなれば我いろ
いろの悪愛をみ佛涅槃の相なるんと嘆のひそ乃我中よりい
そぎ拘尸城に満うでのふもや四七日をるゆぬ毘離國阿勒伽羅王
毘耨國の不畏王遮伽羅國王又師伽那王波肩罗外道名王など
にはみな三七日の後にきこゆ如くにも世尊の涅槃乃ものやうおは
し御寺をおどろきこのなしひいそぎ拘尸城にまうで供養し礼
おし舎利を請じ奉らふ其さ波皆かならずそ所りに法珠内の人

其答の云樂も又おなじことなまば諸國共に打恨みけく志るもぞの
事諸國ともに一度せ志るまぞこれぬまとみな王臣共にかなしは
いきどをなす其心やかりるくれば此きまて拘尸城に使して舎利芸
分をもとめ給ふおのくに乃云樂にもしかるへ雖れざかせは兵を
もせて志るてうぞひとかはらんと拘り拘尸城諸國に答へて強力
をもちゆるは諸王其心に尚りきるべし世尊大慈父家界に於は
し尚して般涅槃しなふ全身其舎利永劫此國にとゞめて供養
し事深厚しつるに分邑の諸人にわかちたるふ厚のうぞとて申ふ
深厚き色もなし諸國其使はいふぎかへりそ其答を聞ぞれ八國
々四兵をとり其人拘尸城にむかへら深又拘尸城は四兵の扉をいふ厚き

巻七之四十二

にもなりて壯士男女其わかのちなく舎利を志るに情事ふにより
諸國と兵をまじへたくかひ身を捨命をすれ深とも舎利をと
どめ事らんと詞先をわすれいさみ立弓箭も其ぐ鉄とかいまや
合戦とまちうへ城外には七國乃大軍四方をうちかこみ舎利
をかたさかせず其に乱を入てうぞひ出らんとすふ此所うそ
ひいきにほ事にはともに深も落やみぬべしそれ時大扉の中に
姓熛といへ深波羅門内分八軍其中にあまた大音聲をあげて
告ていふ城中其力士扉きこれよ世尊は無量劫善を法み悪を
修しまふ諸君も又此乃御をしへ信の法を修し悪れ法をほ知
らふ事を守今何其心ぞ涅槃其後に舎利をあらそひ兵を起してあひ

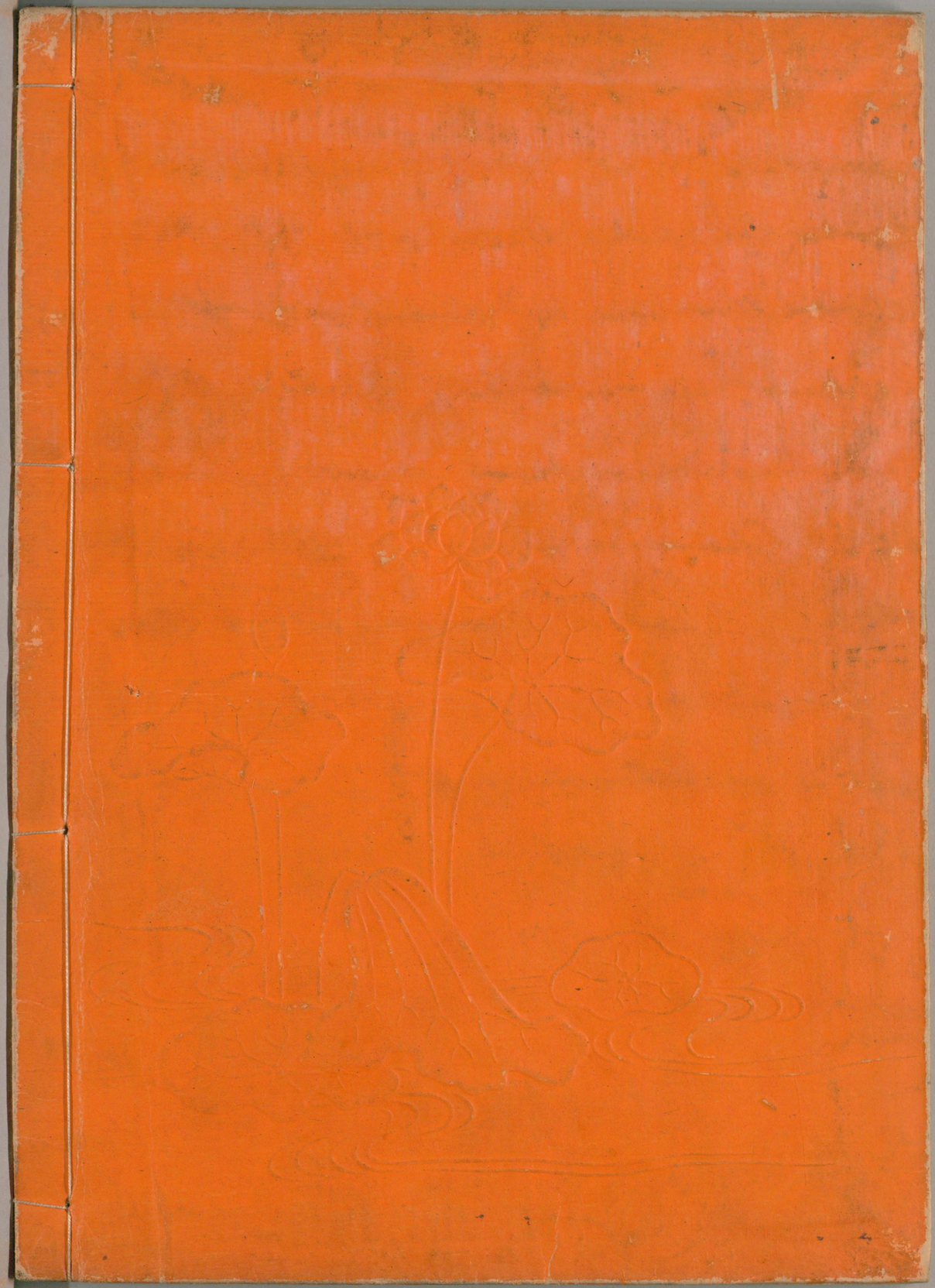
うだふべきことをやまたびのごとくそれ如来いませしは猶上
もあまつさへいまはたらかせおまします世なるに涅槃しのべども
舎利なほ現在(げんざい)のふしぎでうやをてへをすすれて共(とも)に相伐(あいうちばつ)の民
をそこおそんなど多ちおろかにて依國(よこく)ともに供養(くやう)し永久(ながく)福(ふく)を修
せらるべしこれ大慈父(だいじふ)をそろ心のはぐくみをにこまやかなるちばを君
さもまことによりて猶れ力士等やうくお心とけをにこまやかなるちばを君
ばなほふまつごのふべしとてゆるぬちて誰(たれ)この分なんとのふふ庶民(しょみん)百姓
標婆羅門(ひゃうばらもん)ら心平等(びやうどう)なれば此婆羅門ふゆるすべしとて婆
羅門彼獅子座(ししざ)ふれちめ舎利をふ分ちて鍐(びやう)にもて七國まねくこ一分
を城中に安むじて衆ふ告てはじめて究舎利をもつて壇(こん)場(じやう)を作(つく)りおの

の頭那羅聚落(くらくろ)にこ塔(とう)の縁塔をたてて供養(くやう)
香樹(こうじゅ)ばらとに拘尸那城(くしなじやう)ふ還(かへ)りて本國ふり塔(とう)をたてく
酔養(すいやう)して時(とき)ふ拘尸城(くしじやう)ふもろくの力士(りきし)ふ分ち舎利(しゃり)をば國中(こくちう)
塔(とう)をたて義香(ぎこう)妓樂(ぎがく)など心(こころ)をにそ供養(くやう)し次(つぎ)波羅(はら)奈國(なこく)ふ二
分(ぶん)ち舎利(しゃり)をば師伽那婆國(しかなばこく)ふ三分(さんぶん)ち舎利(しゃり)をば阿勤遮國(あぎゃこく)の諸(もろ)
利帝利(りていり)ふ四分(しぶん)ち舎利(しゃり)を得(え)毘攞(びら)洲(しう)ふもろくの婆羅門(らもん)ふ五分(ごぶん)ち舎
利(しゃり)をば毘離國(びりこく)ふ分(ぶん)ち得(え)おはりて本國(ほんごく)ふ歸(かへ)りて塔(とう)をたてて心(こころ)ゆく
のぎの種々(しゅじゅ)ふ供養(くやう)し次(つぎ)遮羅迦羅(しゃらから)王(わう)ふ分(ぶん)ち舎利(しゃり)をば後(のち)くの釈子(しゃくし)ふ七分(しちぶん)ち舎利
をばのびみそふくこの八つ王(わう)のそて塔(とう)をたて供養(くやう)しのふはじめ仏(ほとけ)ふ
礼(らい)し又舎利(しゃり)を請(しやう)しのび時(とき)は如来(にょらい)本生(ほんじやう)者属(しゃぞく)迦毘羅(かびら)國(こく)の王(わう)とおりてゆるは迦毘羅(かびら)婆(ば)
法(ほう)ちくく遮羅迦羅(しゃらから)國(こく)ふ分(ぶん)ち舎利(しゃり)をば毘羅(びら)婆(ば)ふ分(ぶん)ち舎利(しゃり)をば拘尸那城(くしなじやう)ふ分(ぶん)ち舎利(しゃり)をば

国立国会図書館　タイトル『三世の光』 請求記号 182.85-Ko518m
ガラス使用

なしかしはこの遮罗迦羅國に劫毘羅落城の後もなくて釈子うち法王摩伽陀國の主
すませなかふにやちゝば始に迦毘羅國乃釈子出あるべきは重出の理なり
阿闍世王は第八分の舎利を以王舎城にのへ塔をたてゝ供養しまふ
かう舎利をおのちをきたらぬまばもちらくの菩薩衆聞衆天人鬼
國王大臣長者居士等なら由後大衆又ちらに悲號しなみだにくれ
れとのらい礼拜し去なふ此涅槃の縁を異説多くのもめまと先長阿
含に与至て此余涅槃經又甚後分に与ふ釈迦譜をもゆゞへと
至てに乃ちはしをしたゝし仏法なり祐律師の釈迦譜に涅槃乃縁
をもつ至てれとまふ祐以為雙樹八枝の義各有明舎利八分の縁亦有
會故蛻化之體或全或散用能留瑞於羣刹降福於人天丈不生
而假胎無形而委骨甚示跡無教即不思議之事

巻七之四十四



国立国会図書館　タイトル『三世の光』 請求記号 182.85-Ko518m

ガラス使用